

1.6 入市被爆 原爆土壌の行進から
69年

久代 譲

広島長崎に原爆投下され69年 今も毎時数
千人の被爆死者が出ている 私と行を共に
た親しい戦友2人は50代60代にガンで亡くな
り この世では会えない人となった
人工的に作られた原爆放射能は生ませ
ないものではない 治療する薬もはつきりとな
い 現代医学で説明されない事もあま 体内

に入ると女が女か出ない 焼いた骨に骨残り
華がある()こい奴である

昭和19年台湾に住んでいいた私は 中学2年
5才の時 船舶特別幹部候補生として軍隊に
入る事になり 日本に帰るため19年11月基隆
港で 7イグイオンに強行輸送し生還した吉
備津丸(約1万t)に乗船した 前甲板は爆
弾で吹き飛ばし 鉄板は赤サビで引き裂かれ人
骨が()まの毛髪が()ついていた 乗船したとき
米軍三木銃工攻撃された 船は300tとしいた

るる砲中枝銃之「脊反撃」ゴ「ド」ト「言」テ「発」
 射音 一万隻の船が上下動する。朝早く出航
 する 敵三層の信号で「港」ヨ「キ」ト「シ」ル。二の繰返(一)
 港外には奥雷で「穴」の「及」ひ「た」船が「浅瀬」に「乗」り
 かけ「赤」を「び」て「いた」 何隻も

昭和20年1月8日 船は西五、中国大陸の
 瀋州に渡り、上海、青島と海上、朝鮮半島沖
 を南下、数隻で組んだ船団の姿はなく、準備
 津丸の女性2月11日に宇品に入港、通常3〜
 4日ほど日本に着くのが34日かかっていたのである。

軍隊に入るとの闘斗したから入隊したので
 ある。然し、この頃台湾は空軍の戦場であり
 同級生が米戦斗機に射た水死した。台湾
 に入ると父一家4人のうち2人は戦死収容所
 で流刑(左疾痲)せられた。この子の人の
 生死はわからなかつたのである。
 入隊して訓練が續いたから、そして江田島で
 特攻練習がはじまり、我々も志望者調査が行
 われた。左(上期生)22名、右(中)16名、36名
 戦死の報告もある)和達も覚悟を決めた。あ

った訓練のため本隊（広島県忠海町）から
 山口県仙崎港に行き、本土決戦用の物資揚陸
 中に本隊より新任務につくための「帰隊命令
 があり、軍用列車で山陽線と広島を走し、東に
 向った米軍本土上陸阻止作戦参加のようだが、
 夜が明けはじめた下松、光駒のプラントも
 一々にぼんやりと頭や手足をしばったリ、
 だんだんの着物をしきものをまとった人の姿
 が見えはじめた。傷痍軍人にしてはおかしな
 ところを話した竹駒をすき、広島に近くな

子と家が蕪倒されていき、空から家を押し
 潰されていき、なんたのれは爆弾が下から
 上に吹き上るのにと話した。あつた。汽車は己斐
 （現西広島）から先は不通との事で下車。8月
 7日である。馬の前は、体中火傷の人、焼け
 た骨中の肉がザザ口のようになつた人、へた
 リこんでいき人、転がっていき人、外から人
 を探しに来ている人、兵隊さん痛いよ、兵隊
 さん腹がへつたよ、海軍の秘密兵器の爆発し
 た、せかよと光つてドーンといつた、こんた

人々声ぞびてたが之ししていた。軍隊も殺動中
 となび、五千人を塗つてあけり。元寇はさ
 ば人に少しの米を渡し、民家の五衛門屋名で
 雑炊をたたくよる。頼むぐさいご女、山や家で
 守まらぬ燃えて煙を出している所もある。
 隊は本隊と連絡、即帰隊せよとの事で略
 図が示され、市中を抜けて島敷をめぐり、事
 となつた。家屋ごころ樹木が倒れている所、燃え
 ている所ばかり、作候を出し、道を作りなが
 ら進出（後日所、総屋敷）八丁堀等を通

ったので爆心地の近くとわがた）のた。
 道路脇の死体には敵討して、むしり、焼け
 らせんと等あがめめせの物をあけり。馬車引き
 が、手綱を握り、たまた、鞍をかり、大火傷の馬は
 生きたまゝ、立つていた。潮の干満にかいてた
 だより死体、熱くて川に入つたのであつた。
 遠方の鉄橋は工事中だつたので、半裸の兵士が
 何人もあつた。下つて動かない死体があつた。大
 きな側溝に死体があつた。火は追ひつ
 たのか、我々も重い荷物もあつた。暑いのを出

の放しの水を飲む 雨はもたないのには服にホッ
 ホッと黒い汁がたつ。 焼けた工場は（まっ
 くに人が立ってゐる。 その人がだん一ンと倒れて
 火煙があがる 思ゆがア一ツと声が出た。 兵
 士のあとを多くめボロボロになつた人がどい
 て来る。 フラッシュとしゃがみこんで立ちあがら
 ない。 むせりばらばらと川の方に歩きまは
 している。 何人がかたついて行く。 我々は地獄
 の中にいるのだ。 この戦争負けだと思つた。
 無我夢中で広島駅に着く。 己斐駅と同じ有

様で汽車は通さないので 更に向薬 粟に
 海田市へと進む。 やはり道路脇に人が入ら
 ない。 転るがごとく。 夕月女子忠海の本
 隊は帰着。 あれはアメリカの新型飛弾と言ふ
 のだ。 ところがい行軍した兵士全員が夕方に
 にはたき一着に40度前後の発熱でうめきはい
 めた。 夕方に前に容器に氷をいれ半ぬぐいで冷
 やす用意。 ともて輸をつくり半足を（あはれな
 いように）通す。 朝まで続くのだ。 0の隊が
 毛が抜けたはじめて伝めつてくる。 我々も交

自分で着るしかない

代で広島救援に出た兵士も同じようになつて
帰つて来た。

ところがこれで終らなかつた。ほこりを吸
い、チリをかぶり、水を飲み、食事を作る時
放射能をまつた。水も体内にしみ込んだ。原
爆は外部からだけだけでなく内部からも被爆する
のだ。広島被爆の死者は、爆発直後と共
に、9〜10年たつて急に増えはじめている。発病
するのである。放射線で細胞がこめされたり
変型する。その免殺力が低下し発病する。

た。医学的にも解明されていらない。等々、母子お
うど、人工放射能がなかり、体外に出ない。
子供が生まれれば遺伝子はこめされ、こめな
かると心配(本論)が悪くなれば、いよいよおれも
発病か、と不安がよぎる。一生たのたの被爆者だ
つて人畜だ。健康に生る放射能があるのだ。

広島被爆者55万人、会死者28.6万人
この人々が生きておれば、世の役にたつてあ
らう。思えば平和は人類の宝、原爆は人類の
敵である。日本のおまうに東京一極集中なら
死んで国は亡ぶ。

被爆体験について

私は、当時国鉄に勤務しておりました。8月6日原爆投下の日に乗務先から帰着して早速市内にあつた森まで徒歩で行きました。衣服が焼けて体が爛れて死んだ人や倒壊した家の下敷きになつて、火災から逃れるために必死になり水のあるコンクリート用防火用水の近くで焼け死んで識別できないうちにたつてゐる人、目をそむけるような惨状だつた。後日職員が收容されてゐると思われ、小学校へ氏名を確認に行つた。講堂には多数の人が覆かされ手当を受けていた。

顔は巾着で目と口しか見えず体の皮膚は衣服と一緒にとれかけていた。気の毒で言葉もでなかつた。原爆投下後に親戚の女房を確かめに、また

No.2

遺跡片付けの作業で広島市内へ行つた人はつぎつぎと死んでいつたと聞いた。

私は勤務を続けてゐるうちに歯茎から出血したり頭の髪が抜けて体に異常を感じて約3カ月休み通院して治療を受けた。

昭和らる年頃から約4年余り通院して治療を受けた。顔を刺つたとき、ちりぢりな傷をした。これが元で化膿して痛み治療して治る。体のどこかに傷をすまると必ず化膿して痛むので痒くてもかくこどもでぎぎ制服のうえから叩いていた。

傷をすま化膿して痛む治療して治すの連続だつた。年をとると誰でも体のどこかが異状になります。被爆者は、更にいつ発病するかわかりません。当時を記録したメモ等、残つておりませんので思い浮かべながら記すことになりました。

私は^胎胎内被曝者ですから、直接の被曝を体験し、覚えているわけでは
ありません。

1945年8月6日の8時15分に原爆が炸裂した時に、私は母の^胎胎内に
いました。

もし、この時間に母が平常どおり八丁堀の店（美容院）に通勤して
いたら、今の私は、母もろともこの世には存在していません。

なぜなら、爆心地から1KM足らずの場所に美容院がありましたから。

（斜め前には XXXXXXXXXX さんのお父さんの美容院があり
ました。）

被曝当日の朝、広島駅近くの自宅からの自転車通勤の途中で母は、親戚
の叔父さんから「水蜜桃」きもらい、家に仕舞っておこうと引き返す途中
で近所のおばあさんに会いました。思わず差し出すと、すぐに食べたいと
言うので、家の中に一緒に入り、おばあさんは嬉しそうに食べました。
再び、家を出ようとした瞬間に、強烈な音が響き、八丁堀は一瞬にして
廃墟になったのです。何十万人の人が苦しみをがら亡くなりました。

この出来事のおかげで、母のお腹にいた私は助けられ、4か月後に
無事生まれました。（井野口慧子 詩集「火の文字」 水蜜桃 参照）

一瞬の出来事によって、本来死すべき人間が救われたのです。
私達の家族は、この広島市の中心で、2年後には店舗兼自宅を再建し、
生活してききました。

「70年間は、草も木も育たない」と云われたこの地を去ることも
できず、20年間位み続けてきました。

被曝から4か月後に生まれた私の頭髮は、まもなくズルズルと抜けた
落ちたそうです。

意識不明で倒れるてんかん症状や、原因不明の頭痛などの自覚症状

はあっても、放射能の影響など考えるすべも当時にはありません。

母は、まもなく甲狀腺の手術を経験しましたが、放射能との因果関係が認められまでは長い年月を要しました。

残留放射能の影響の益となど、福島原発事故以後に知りました。

人類史上で類を見ない、原爆という悪魔の兵器が使用された戦争、恐ろしい放射能のことなどの情報もなく、死に物狂いで生きることしかこの被爆地ヒロシマにはなかったのです。

戦争は、いつも罪のない一般人が犠牲を強いられています。

被爆から69年、ヒロシマは不死鳥のように蘇ったたとの美辞を並べても、「安らかに眠ってください、この過ちは繰り返しませんから」という慰霊碑に刻まれた言葉は、現段階でも残念ながら、単なる言い訳にしか聞こえてきません。

戦後69年経っても、悪魔の核兵器は世界に何万発も存在し、現在も戦争はなくなりませんが、第三次世界大戦の不安さえも予感される今の情勢に、憤りさえ感じています。（戦争の仕掛人がいるとすれば、許せません。）核兵器の廃絶と原子力発電所の廃止の方向は、確がみても被爆地ヒロシマ

・ナガサキのそして日本が積極的にとるべき道だと確信しています。また戦後69年間続いてきた日本の平和は、戦争で亡くなった多くの人達の犠牲を礎にしていることを、忘れてはならないと思います。

政治家の皆様に訴えたいのは、良心を持って正しい道筋を選択してほと考えています。

2014.5.26 迫 青樹

八月六日、午前八時十五分

いつもより遅い朝食をとっていた、その時。轟音と共に、すさまじい揺れ――

「爆撃だ――」

という絶叫の中、退避しようとした瞬間、階段が崩れ落ち、逃げ道を失う。何とか二階から這うように降り、防空壕に逃げ込む。外の様子は全くわからない。しばらくして、外に出ると、街は原形を留めない。辺り一面、全てが瓦礫と化していた。すでに息絶えた人、血を流す人……

「どこに爆撃が落ちたんだ」

それすら分からない。不安な眸が流れる。

――市街地を一望できる比叡山に登る。

「何が起ったんだ」

広島の街全体が瓦礫となり、あちこちで火の手が上がっているではないか。

――茫然自失、隠棲が走る。

やがて火傷を負った人たちが、列をなして、どこ行くともなく、死の表情でやってくる。何をやる術もない。

「兵隊さん、助けてえ」

……………

「どうやって助けたらいいんだ」

助けたくても何もできない。誰どころか着せてやるものさえない。できることは夏の灼けつく日差しを避けて、涼しいところに運んでやるしかない。無力さを痛感する。今でも「助けてくれえ」という言葉に苛まれる。助けてやれなかった罪悪感にも似たものに襲われる。

死んだ赤子をしっかりと抱いた母親、目が見えないその母親を梅で幼子が手を引いている。哀れというには哀れすぎる。日陰に連れて行って休ませる。数時間たつて見に行くと、すでに母親も息絶え、死んだ母親にすがって泣き寝ついている子。

――この光景が街の至る所で見られる。当たり前前の光景になつていたのである。

夜になると、街全体に死臭が溢れる。次から次へと死体を焼いている。死臭に覆われた街、まさしく死の街となった。



愛児を抱き氣絶ひの身に迷ひて母親 顔も 灰火用
 水の中へ突込 玉兎郎を 隨ひさ水た家の下から脚す
 呼ぶ人 少女が「オカシキ下敷のやち助けし」と老を力言ふ
 けし時なも皆を迷はずの心死に誰人として助けよう
 ともなき 法道 水づも押しハケで助けも救ひよう液の
 父を溺せるとする梅人 水の下から可愛き子供の音がかた
 多く くしと一生懸命 呼ぶ子供 ぐんぐんすき氣氣
 皮膚の傷が巨 鼻息が体の奥迄し 込む 猛火の
 中々 竹笠 濁布を濡し 街中を 通り 捲り 荒神橋に出
 ると 橋の欄干は 吹流を ちくちく 川岸には 一生懸命の口
 に水も 思ふ 田舎の女が 泣別りの 女の人で一杯
 東舞 兵庫の 地は 毛の こと 切れて 序言 人手 足を 痺れ 傷
 了 草草 中 突圍 に行 こと すき 命 或人 は 水 武 人
 は 田の 名 子 供 の 名 が 愛 事 の 名 が 呼 ぶ 下 の 動 詞 人
 口 心 も 毛 の 磨 り 作 ら 毛 の 毛 の 学 生 飛 べ け 所 を 丸 出 し
 心 横 に あり 女 性 眼 目 が 光 り 助 け を 求 め 目 動 け
 盛りの 半年の 雨 任 此 好 好 状態 は 言 葉 で は 古
 表 面 意 旨 は 惨 劇 まで あり 後 父 が 迷 っ て 水
 安心 感 龍 手 足 と 火 傷 した 所 が 痛 び 出 す
 特に 大 湯 が あり 新 命 は 狂 ぶ 格 に 痛 い として
 無性 に 水 が 汲 ぬ 一 滴 の 水 も 何 ぼ 湯 屋 場 も し の
 時 水 が あり 腹 一杯 飲 ん だ じ たり 更 りの 冷 水 死 体 の
 周 圍 に 居 る 現 在 の 物 語 と 伝 へ ず 病 痛 佛 が 守
 て 下 っ たり か も 解 け 居 居
 上 げ て 序 言 中 に 突 如 復 の 八 分 山 に 登 っ て ぬ だ せ 二 七
 一 瞬 定 住 郵 局 と 呼 ぶ 唯 不 氣 味 在 ず 一 型 の 雲 と
 前 野 と 煙 と 火 の 桶 花 更 の ぬ だ せ 居 居

愛児を抱き氣絶ひの身に迷ひて母親 顔も 灰火用
 水の中へ突込 玉兎郎を 隨ひさ水た家の下から脚す
 呼ぶ人 少女が「オカシキ下敷のやち助けし」と老を力言ふ
 けし時なも皆を迷はずの心死に誰人として助けよう
 ともなき 法道 水づも押しハケで助けも救ひよう液の
 父を溺せるとする梅人 水の下から可愛き子供の音がかた
 多く くしと一生懸命 呼ぶ子供 ぐんぐんすき氣氣
 皮膚の傷が巨 鼻息が体の奥迄し 込む 猛火の
 中々 竹笠 濁布を濡し 街中を 通り 捲り 荒神橋に出
 ると 橋の欄干は 吹流を ちくちく 川岸には 一生懸命の口
 に水も 思ふ 田舎の女が 泣別りの 女の人で一杯
 東舞 兵庫の 地は 毛の こと 切れて 序言 人手 足を 痺れ 傷
 了 草草 中 突圍 に行 こと すき 命 或人 は 水 武 人
 は 田の 名 子 供 の 名 が 愛 事 の 名 が 呼 ぶ 下 の 動 詞 人
 口 心 も 毛 の 磨 り 作 ら 毛 の 毛 の 学 生 飛 べ け 所 を 丸 出 し
 心 横 に あり 女 性 眼 目 が 光 り 助 け を 求 め 目 動 け
 盛りの 半年の 雨 任 此 好 好 状態 は 言 葉 で は 古
 表 面 意 旨 は 惨 劇 まで あり 後 父 が 迷 っ て 水
 安心 感 龍 手 足 と 火 傷 した 所 が 痛 び 出 す
 特に 大 湯 が あり 新 命 は 狂 ぶ 格 に 痛 い として
 無性 に 水 が 汲 ぬ 一 滴 の 水 も 何 ぼ 湯 屋 場 も し の
 時 水 が あり 腹 一杯 飲 ん だ じ たり 更 りの 冷 水 死 体 の
 周 圍 に 居 る 現 在 の 物 語 と 伝 へ ず 病 痛 佛 が 守
 て 下 っ たり か も 解 け 居 居
 上 げ て 序 言 中 に 突 如 復 の 八 分 山 に 登 っ て ぬ だ せ 二 七
 一 瞬 定 住 郵 局 と 呼 ぶ 唯 不 氣 味 在 ず 一 型 の 雲 と
 前 野 と 煙 と 火 の 桶 花 更 の ぬ だ せ 居 居

今朝の下の通り、括けて来たのと、思ふと、身振りの七
 つた安心感、くぐり、とく、通都市駅に出るまで
 道路横の水溝、口には、清快な人が、
 水を飲ませてく、水、水を飲まねば、死ぬぞ、
 しく水、通都市駅に行くと、通都市、衛生員が、
 けずが、く、右、左、手を、握り、また、お、お、
 見た、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
 昔、後、三、三、三、三、三、三、三、三、三、三、
 それ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 次、次、次、次、次、次、次、次、次、次、次、次、
 お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、
 汽車の中、では、私も、大、大、大、大、大、大、
 の、破、破、破、破、破、破、破、破、破、破、破、破、
 着、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、赤、
 お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
 車、が、着、着、着、着、着、着、着、着、着、着、
 少、少、少、少、少、少、少、少、少、少、少、少、
 た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、
 が、見、見、見、見、見、見、見、見、見、見、見、見、
 け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、け、
 て、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 来、来、来、来、来、来、来、来、来、来、来、来、
 の、他、他、他、他、他、他、他、他、他、他、他、他、

其の後

明けの七日、発熱、する、体を、田舎、に出、田舎に、
 介、介、介、介、介、介、介、介、介、介、介、介、
 一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
 に、坐、坐、坐、坐、坐、坐、坐、坐、坐、坐、坐、坐、
 火、火、火、火、火、火、火、火、火、火、火、火、
 焚、焚、焚、焚、焚、焚、焚、焚、焚、焚、焚、焚、
 こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、こ、
 熱、熱、熱、熱、熱、熱、熱、熱、熱、熱、熱、熱、
 十、十、十、十、十、十、十、十、十、十、十、十、
 た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、
 了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、了、
 停、停、停、停、停、停、停、停、停、停、停、停、
 凌、凌、凌、凌、凌、凌、凌、凌、凌、凌、凌、凌、
 た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、
 私、私、私、私、私、私、私、私、私、私、私、私、
 徒、徒、徒、徒、徒、徒、徒、徒、徒、徒、徒、徒、
 て、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 世、世、世、世、世、世、世、世、世、世、世、世、
 の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
 朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、
 事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、事、
 重、重、重、重、重、重、重、重、重、重、重、重、
 ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、
 安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、安、
 誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、誰、
 毎、毎、毎、毎、毎、毎、毎、毎、毎、毎、毎、毎、

直接神往呆痴に生かされ如く痛く焼く火箸
 を体に当てられる思ひで十三才の私は泣き泣き
 田舎を戸惑ふ
 射とラ先の奥師は左身の手をも曲げることが出来ず
 朝も晩も傷口が付張る之痛くて思ふ持に成る言のち
 無理に田舎に叱り飛ばされ少づつ動かす運動する
 酒をから出血が激しく知り知れ一層不安は増し人から
 人の訃が聞取が抜くも死ぬるふりて毎日毎日
 田舎と共た教を教へる人持にも新刊の引張ては
 まだ住まう口は父が苦業も心から味合ふ
 一月間全く体が衰弱し居るの傷口は如くも
 殆んど並りなく膿水も着が東にまつかむ如く世の中の
 操が良いと云へば此れも、又ソノ操も蘇が良いと云へ
 ばそれ迄、玉子の白味に茶の粉米が良いと云へば此れも
 付けそれをも皆が不快者に向かひて新講師に
 お辞を致しは良いと云へば聞けは気狂ひの存に
 お辞をもらふ、十月も終りを告げやうやく傷口
 も快不に向かひて体重命も言ひのな保好にある
 学校に出舞けて自言も驚馬ことばかりでラスの
 六才名中約軍命は又席を顔が見えず出席
 して居るは金品が火傷の跡を身体のおこかに残
 して居るのにならう、一瞬の擡身以来の顔合也
 が顔が浮合皮けて並形して居る学友も指を金
 針を友、耳の二かつかれ居る友、顔もまた不気味
 たいロストが先が居る学友、共に散離の経路や
 病気の事、父事との学友の訃言も皆かた症床
 生活も忘れず会は嬉しき一杯のあった。

首を元気で外は跡球に厚障子は卓球に
 ぶじカドシの無名は有り持た飛び返るケ水は
 十一月に入り暴風は急激に傷跡に降りすきす
 痛も教書、窓には風も新雨紙を貼り
 名を付くものは一つも無く金と静しく至んだ治
 生活のありは学生時代と卒業後の苦業
 は人の前に出張は右天右顔面を隠す持に、
 電車に乗れば必ず心倒の方には右が行く持た降り
 右手は杖ノトに入れて出す、袖水は手に掛り
 マリヤが隠し金持心も思春期が来た
 此の種のハや傷跡も持て人に向けず味合ふ事
 出来ず、非心倒である

丸

四七年は、
 肺浸潤に陥り退社、六月の自覚、養
 全社し、
 保体内、
 任事先を授けて孫の如くは、
 昔は、
 八月は友人共で、
 五六年白血球が減少し、
 翌年の暮から右眼の視力が弱り、
 悩やまされ、
 父達を授けて孫の如くは、

入就 姉は三日間安眠も探し難く死んでしまふ
 子孫が厚澤江村におゐる。此の地は燦爛と子孫は
 中身が四三他身とし言は。本意にカトシと云ふ物。
 忍びと云ふ事体跡と見れば解らぬと思ふ。
 利が為り及ばぬ朝日三車と云ふ公馬刺
 と別れにまゝ体骨も見ふらぬ事人となる
 悲しく思ふ出たくお出ま事。私と同じ事
 被入に念を学友は所障とて三才の若き此の世も
 去り之氣を基に下人を行たさぬ事とて不安
 なる日通ふも余は此の地を去りし
 五至七年大國學に入隊す。三身在梅支支受し
 何事か。他例に年長とて學問が非學と爲す
 還氣を身の中へ入る。此の地を去りし。厚澤生徒は何
 事も起す。無事除隊することが出来た。
 元六三年に結婚。不安におきて事無き事と云ふ事と
 放射能に依る不具の赤い味が生まはしなかに六の題を
 女私古黒の手に息まじ。神に感謝するの祈
 其の後庭園菜畑の週五日の仕事を休
 疲勞が激しく朝晩の学業利は離ること
 出来ぬ。不安な毎日である。
 厚澤に依る先立看の皆様の厚福を祈ると云ふ
 平和の世見が成ります。

一九六四年